

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531091

研究課題名(和文) アジアの芸術教育における西洋の影響と独自性の形成に関する研究

研究課題名(英文) A Study of the Influence of Western Culture and Development of Originalities in Asian Art Education

研究代表者

佐々木 宰 (Sasaki, Tsukasa)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40261375

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アジアの芸術教育が西洋芸術と教育制度を受容し、自国及び地域の文化や社会的な背景を踏まえて独自の芸術教育を形成していく過程が、韓国及び台湾、シンガポールの事例を通して明らかになった。

韓国及び台湾の芸術教育については、日本統治下における学校教育制度の整備、日本への留学による西洋芸術の受容過程の検討を通して、アジアにおける特徴的な芸術教育の系譜であることが導かれた。シンガポールの芸術教育については、イギリスの植民地統治からの自治政府成立期にかけて、多民族・多文化社会を背景とする特徴的な芸術教育の系譜が形成されたことが導かれた。

研究成果の概要(英文)：In this study, the process of the development of Asian art education which had accepted the western art culture and the education systems based on the culture of their own countries and their social backgrounds was revealed through the case study of Korea, Taiwan and Singapore.

In the case of Korea and Taiwan, it was confirmed that their art education was distinctive in Asia in the view point of the development of the education systems, acceptance of the western art by the students learned in Japan in colonial era. In the case of Singapore, it is also confirmed that its unique art education with a background in the multi-racial and multi-cultural society has been developed from the period of beginning of the self-government under British control.

研究分野：美術教育

キーワード：芸術教育 アジア 西洋 独自性 韓国 台湾 シンガポール

1. 研究開始当初の背景

我が国をはじめとするアジアの芸術教育は、近代化の過程でもたらされた西洋文化と、その影響によって生じた自国及び地域の文化に対する新たな価値創造の拮抗の中で変容を遂げてきた。明治初期の我が国においては、西洋芸術の流入が「日本的なるもの、東洋的なるもの」への意識を覚醒させ、両者の対立を含みながら学校教育における芸術教育の内容が形成されていった経緯がある。

今日、西洋芸術や文化はすでに世界標準となっており、ことさらに「西洋的であること」は意識されない。その一方で、学習指導要領においては我が国の伝統的な文化に目を向けることの重要性が示されるようになった。しかし、現在の学校教育における芸術教育は西洋芸術を基盤にしたものであり、その中で我が国の伝統的な芸術を芸術教育の内容としてどのように解釈すべきかは、簡単には解決できない問題として残されたままである。

他方、アジア諸国の芸術や芸術教育の形成過程に目を向けると、西洋とアジアという関係の他に、アジア内における関係性もまた強く作用していることがわかる。日本統治時代の韓国や台湾では、日本に留学して芸術を学んだ学生たちが、その後の芸術界の先駆的な作家として活躍している。西洋芸術が日本経由でもたらされると同時に、当時の日本の芸術も持ち込まれた結果、これらの国及び地域の芸術におけるオリジナリティは複雑なものになっている。アジアの芸術及び芸術教育の独自性を理解するためには、その形成過程を踏まえる必要がある。

東南アジアに目を向けると、英領であったマレーシア及びシンガポールでは英国のアジア支配を通じて西洋芸術がもたらされるが、華人、マレー人、インド人による多民族社会の中で、民族文化と融合し、かつ南方という独特の環境の中で独自の变化を遂げている。

これらを踏まえて、アジアの芸術とその教育には、西洋芸術を受容した日本の植民地支配を背景にした文化や教育制度・内容の循環的伝播によって独自性の形成に至った系譜、さらに西洋の直接支配によってもたらされた芸術を民族文化や環境を通して形成された系譜が想定される。教育内容の形成にはさらに学校教育制度や教育課程編成、教員養成の要件などが関与してくる。西洋芸術と伝統文化の解釈の在り方を考察しながら、アジアの芸術教育の形成過程を明らかにすることが必要であると考えに至った。

2. 研究の目的

本研究は、アジアの芸術教育が西洋芸術をどのように受容し、自国及び地域の文化や社会的背景を踏まえて独自の教育内容を形成してきたのか、その過程の一端を明らかにすることを目的とする。日本を経由して近代芸術を吸収した韓国及び台湾の事例と同時に、

多民族・多文化社会を背景にイギリスから近代芸術を吸収したシンガポールの事例に焦点を当て、文献及び実地調査を実施する。これを通して、アジアの芸術教育の内容形成において西洋芸術と独自文化が、各国及び地域の関係性の中で受容・変容して教育内容となった2つの系譜、すなわち(1)日本と韓国、台湾における芸術及び芸術教育の伝播・形成過程、(2)シンガポールにおける芸術及び芸術教育の形成過程を明らかにする。

3. 研究の方法

研究の方法は、国内における文献研究と、国内及び対象国及び地域(韓国、台湾、シンガポール)における実地調査によるものとした。近代におけるアジアの芸術及び芸術教育の動向を、研究代表者及び研究分担者がそれぞれの専門分野について文献研究によって把握する。国内での調査は、大学及び美術館等において近代におけるアジアへの芸術の伝播の基礎資料を得ることを目標とした。対象国及び地域での調査は、現地の研究者の協力を得ながら、主として芸術系大学等の高等教育機関、教員養成機関、博物館及び美術館、芸術団体等において、現地における芸術及び芸術教育の形成過程についての資料収集、関係者への面談を行った。これらの文献研究、国内での調査、対象国及び地域での調査結果を照合し、アジアの芸術教育において西洋芸術がどのように受容され、自身の文化や社会的背景を踏まえて独自の教育内容が形成されてきたのか、その過程の一端を明らかにすることとした。

研究初年度である平成24年度は、3年間の研究計画を確認するとともに、それぞれの分担における文献研究を進めて研究成果を共有すること、国内及び韓国・台湾における実地調査を行うことを主眼とした。韓国における実地調査は、韓国芸術音楽院、京仁教育大学校などの芸術系大学及び教員養成系大学の芸術科を対象とした。台湾における実地調査は、国立台北教育大学及び同大学附属美術館とした。

平成25年度は、韓国、台湾、シンガポールの芸術及び芸術教育に関する文献調査を進めるとともに、シンガポール及び韓国において実地調査を進めた。韓国においては韓国造形教育学会員研究者との研究交流、シンガポールにおいては、南洋理工大学国立教育研究所(National Institute of Education, Singapore; NIEと略称)、教員研修機関Singapore Teachers' Academy、芸術専門の中等教育学校であるSchool of Arts Singaporeを対象とした。

平成26年度は、文献研究、国内での調査及び韓国、台湾、シンガポールにおいて実地調査を進めた。韓国においては、金ダルジン美術資料博物館等、台湾においては、高雄市立美術館、嘉義市立博物館、国立台湾美術館、国立東華大学音楽学部を対象とした。シンガ

ポールにおいては、National Institute of Education, Teachers' Academy, Singapore Art Museum, Nanyang Academy of Arts を対象とした。

文献研究及び実地調査の研究成果については、随時論文及び学会等での研究発表を通じて公表しつつ、研究代表者及び分担者間での情報の共有を図ることとした。

4. 研究成果

(1) 日本と韓国・台湾における芸術及び芸術教育の形成過程

韓国と台湾における近代芸術教育は、日本の影響下及び統治下における近代的学校教育制度の導入、日本を経由した西洋美術の受容を通して、学校教育における普通教育として展開しており、アジアの多様な美術教育のなかで、一つの系譜を成している。

韓国及び台湾の近代教育史については、それぞれの国及び地域の教育史のほか、阿部宗光・阿部洋『韓国と台湾の教育開発』（アジア経済研究所、1972）、弘谷多喜夫・広川淑子「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較的研究」（北海道大学教育学部紀要、第22号、1973）などの先行研究をもとに、韓国と台湾の教育史を俯瞰的に把握した。これを基盤に、金香美『韓国初等美術教育の成立と発展』（海星文化社出版部、1996）、楊孟哲『日本統治時代の台湾美術教育』（同時代社、2006）などの研究成果を参照しつつ比較することによって、1895年以降を中心とした台湾と韓国（朝鮮王朝、大韓帝国、朝鮮）における近代的教育制度の整備の過程と、芸術教育の黎明期及びその変遷の過程を俯瞰的に把握することができた。

芸術及び芸術教育の内容については、文献資料による情報はもとより、現地での実地調査を通じた関係者及び研究者との面談調査、資料収集によって、その詳細を把握することができた。

韓国では、韓国芸術音楽院の閔庚燦教授から近代西洋音楽の受容と発展史について、また京仁教育大学校美術教育科の李珠燕教授、音楽教育科の権徳遠教授から戦後の美術及び音楽教育の教育課程の変遷過程に関する資料と情報を得た。また淑明女子大学の金香美助教授（研究協力者）からは近代美術教育史研究の詳細情報を得た。金ダルジン美術資料博物館では、韓国の近代から現代までの図画及び美術教科書の実物を閲覧し、複写することができた。教科書は日本統治時代から朝鮮動乱期及び戦後の、我が国では未確認の教科書も含まれ、貴重な資料を得ることができた。

台湾では、国立台北教育大学の林曼麗教授から近代台湾美術と美術教育に関する情報の提供を受けた。特に、同大附属北師美術館で開催された「序曲展」において、近代台湾の先駆的な作家の作品を確認するとともに、それらの詳細について同展企画者である林

教授から解説を受けた。近代台湾の先駆的作家と作品については、高雄市立美術館の張雅晴研究員の研究協力を得ながら同美術館、嘉義市立博物館、国立台湾美術館、台北市立美術館等で資料を収集することができた。また台湾における美術教育研究の先駆者である王秀雄台湾師範大学名誉教授、台湾を代表する世界的版画家である廖修平台湾美術院院長に面談し、台湾の近代美術と現在の教育内容との関係について説明を受けたことは、貴重な情報収集となった。現在の芸術教育の教育課程と内容については、国立東華大学芸術設計学系の林永利教授、音楽学部の彭翠萍副教授らを通して情報と資料提供を受けている。

また国内では、福岡アジア美術館で開催された「官展にみる近代美術」展及び同時開催講座における研究者との意見交換、さらに東京藝術大学美術館で開催された「台湾の近代美術」展及び台湾近代美術国際学術セミナーを通して、近代におけるアジア諸地域への日本の芸術の伝播についての最新の研究成果と情報を得た。

上記のような文献研究及び実地調査における諸種の成果を踏まえ、近代におけるアジアの芸術及び芸術教育の伝播と形成の一つの系譜として、日本と韓国・台湾の関係を俯瞰的に確認することができた。芸術に関しては、近代日本が受容した西洋美術が、東京美術学校をはじめとする日本への留学生や文展（帝展）、鮮展、台展等の官展を通して韓国と台湾に伝播している。芸術教育に関しては、植民地支配を通じた学校教育制度の移植の中で段階的に形づくられていくが、武断政治から文化政治という植民地統治の転換点において、芸術や芸術教育が統治上の方策として機能しえたことが確認できた。

他方、植民地統治における同化政策は、同化と差別化の矛盾を内容しており、朝鮮及び台湾の文化や芸術の独自性についての複雑な意識を残している。この意識は、芸術においては、鮮展・台展で求められた「地域色」の問題であり、芸術教育においては植民地統治期における民族の芸術文化に対する評価の問題ともなっている。

以上のことから、近代日本と植民地朝鮮・台湾における芸術教育の系譜は、「西洋対アジア」という構図が「日本対朝鮮・台湾」という構図に置換された、アジア内におけるオリエンタリズムの再生産という構図の中で、独自の芸術観と教育制度、芸術教育の内容が、芸術界と教育界の双方から形成されてきたことを導いた。

研究成果については、学術論文のほか、韓国造形教育学会及び釜山大学美術学部における口頭発表、美術科教育学会における口頭発表を通して公表することができた。

(2) シンガポールにおける芸術及び芸術教育の形成過程

シンガポールにおける教育の歴史は、イギリスの海峡植民地時代から始まり、植民地政府によるマレー語系学校その他、地域社会や同族集団、宗教系団体が設立した学校もあり、それぞれに異なる指導言語と教育内容をもつマレー語系、華語系、タミル語系、英語系学校が並立していた。そのため、共通の教育内容をもたずに学校教育が長く行われたが、1950年代後半から段階的に自治権を獲得した自治政府によって、全ての言語系学校の共通内容の設定と学校管理が目指された。

シンガポールの教育史については、Doraisamy, *150 years of education in Singapore*(TTC Publications Board, Teachers' Training College, 1969), Wong, *Educational Innovation in Singapore*, (The Unesco Press - Paris, 1974)及びYip and Sim, *Evolution of educational excellence : 25 years of education in the Republic of Singapore*(Longman, 1994), などの先行研究をもとに海峡植民地時代からの学校制度について把握した。

海峡植民地時代の学校における芸術教育の記録は見つけ出すことができなかったが、自治政府成立期の美術教育及び音楽教育のシラバスについては実物を確認し、その写しを得ることができた。シンガポールの全ての言語系学校に適用された美術教育とその内容及び教育課程は、1950年代後半から示されたシラバスとして示されており、1959年に示された Art and Crafts シラバスがシンガポールにおける初めての美術教育課程であることを確認できた。なお、この1959年のシラバスについては英語版と華語版を確認している。また、これに続く1961年の美術教育シラバスについては、英語版、華語版、マレー語版、タミル語版の現物を確認し、その写しを得ることができた。

シンガポールの芸術教育の教育課程と現状については、NIEのKehk Bee Lian講師ほか美術教育スタッフ、Lum Chee Hoo助教授ほか音楽教育スタッフの面談調査を通して把握することができた。また、Singapore Teachers' AcademyではTang Hui Jing美術プログラムマネージャー、Suriati Suradi音楽プログラムマネージャーらとの面談調査を通して教員研修の観点から芸術教育の実態に関する情報を得た。NIE及びTeachers' Academyの附属図書館において美術及び音楽のシラバス及び教科書の第一次資料を確認し、その写しを得ることができた。さらに新設の芸術中等学校 SOTAでの調査によって、シンガポールの芸術振興政策と芸術教育の関係を確認することができた。

シンガポールにおける西洋芸術の影響と芸術の発展に関しては、同国で最も長い歴史をもつ美術学校であるNanyang Academy of Artsを取材し、シンガポール美術の形成に強い影響を与えたNanyangスタイルについての知見を得た。

上記のような文献研究及び実地調査における諸種の成果を踏まえ、シンガポールには、イギリスの植民地として西洋美術を受容した歴史的背景があり、さらに多民族社会における学校教育制度が構築される中で芸術教育の価値が様々に解釈され、アジアにおける芸術及び芸術教育として独自の系譜が形成されてきたことを導いた。特に、自治政府成立期の1950年代後半から1960年代には、西洋美術を多民族社会における共通内容として教育課程のなかで機能させつつ、民族の伝統的な文化の均衡に配慮した芸術教育の内容設定が試みられており、この傾向はその後も教科書等を通してより具体化されている。

他方、今日では民族を超えたシンガポリアンとしてのアイデンティティの模索や文化創造も試みられており、芸術教育は産業振興を基盤にした芸術振興政策としても位置づけられている。したがって、シンガポールの芸術教育における西洋美術は、多民族・多文化社会における共通性の担保という側面をもち、これを踏まえた芸術教育の内容は、民族構成による軋轢に配慮した伝統的な文化との均衡を保ちながら、現実的な教育制度への対応を通して形成・発展してきたことが確認できた。

シンガポールにおける芸術と研究成果については、学術論文のほか、NIEのユネスコNIE芸術リサーチセンター(Unesco-NIE Centre for Arts Research in Education)主催のフォーラムにおける口頭発表を通して公表することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10件)

佐々木室, 「シンガポールの初等学校美術教育における新シラバスと教科書--2009年実施のシラバスと教科書に基づいて」, 『美術教育学(美術科教育学会誌)』, 査読有, 34号, 2013, pp.205-216

福田隆眞・佐々木室・麻麗娟, 「日本中小美術 新学習指導要領及教材紹介」, 『当代美術教育研究』, 査読有, 2013, pp.169-177

佐々木室・中西紗織・福田隆眞, 「シンガポールの芸術振興政策と芸術教育」, 『北海道教育大学紀要(教育科学編)』, 査読無, 第65巻第1号, 2014, pp.73-88

佐々木室, 「シンガポールにおける芸術教育の系譜--1959年『美術と工芸』シラバスに基づいて」, 『釧路論集(北海道教育大学釧路校研究紀要)』, 査読無, 第46号, 2014, pp.195-204

佐々木室・福田隆眞, 「台湾の芸術教育教

科書における近代美術--『芸術と人文』の教科書における近代作家の記載を通して』、『北海道教育大学紀要(教育科学編)』, 査読無, 第 65 巻第 2 号, 2014, pp.277-290

王宇鵬・福田隆眞, 「陳澄波の美術活動とその影響について」, 『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 査読無, 第 39 号, 2015, pp.149-156

佐々木宰, 「自治政府成立期のシンガポールにおける美術教育課程--1959 年及び 1961 年美術工芸シラバスに基づいて」, 『美術教育学研究(大学美術教育学会誌)』, 査読有, 47 号, 2015, pp.127-134

佐々木宰, 「多民族・多文化国家シンガポールの美術教育」, 『教育美術』, 査読無, 871 号(2015 年 1 月号), 2015, pp.38-41

佐々木宰, 「韓国と台湾における近代美術教育」, 『北海道教育大学紀要(教育科学編)』, 査読無, 第 66 巻第 1 号, 2015(掲載予定)

中西紗織, 「シンガポールの小学校音楽科におけるシラバスと教科書」, 『北海道教育大学紀要(教育科学編)』, 査読無, 第 66 巻第 1 号, 2015(掲載予定)

[学会発表](計 7 件)

福田隆眞, 「アジア美術文化理解のための視覚言語:収斂と多様性」, 韓国造形教育学会(招待講演), 2013 年 11 月 9 日, 明示大学校(韓国・ソウル)

Sasaki Tsukasa, Fukuda Takamasa and Nakanishi Saori, The Research of the Influence of Western Culture and Development of Originalities in Asian Art Education, CARE Forum Series, Unesco-NIE Centre for Arts Research in Education(招待講演), 12th March 2013, National Institute of Education, Singapore

Nakanishi Saori, Role and Effect of Language Used by the Noh Masters in Noh Lessons, CARE Forum Series, Unesco-NIE Centre for Arts Research in Education(招待講演), 12th March 2013, National Institute of Education, Singapore

福田隆眞, 「視覚言語と日本美術の特性」, 釜山大学校美術学部美術教育セミナー(招待講演), 2014 年 3 月 25 日, 釜山大学校(韓国・釜山)

Fukuda Takamasa, Art Education to Understand Asian Culture, The 3rd Cross Cultural Asian Art Education

International Conference, Korea, 2014, 6th August 2014, 淑明女子大学校, Seoul, Korea

中西紗織, 「シンガポールの SOTA における芸術教育--演劇コースの授業に着目して」, 日本音楽教育学会平成 26 年度北海道地区例会, 2014 年 8 月 2 日, 北海道教育大学旭川校(北海道旭川市)

佐々木宰, 「アジアにおける美術教育の系譜--西洋美術の受容と独自性」, 第 37 回美術科教育学会上越大会, 2015 年 3 月 28 日, 上越教育大学(新潟県上越市)

[図書](計 1 件)

国立大学法人山口大学大学院東アジア研究科(編著), 福田隆眞・石井由理(編集責任, 執筆), 羅永華・有元光彦・森下徹・吉川幸男・林曼麗・金香美・佐々木宰・足立直之・Chee Hoo Lum・何慧中・高橋雅子・阿川祥子(執筆), 『教育におけるグローバル化と伝統文化』, 建帛社, 2014, 総 201 ページ(編集 pp.1-201, 執筆 pp.97-114, pp.115-132)

[その他]

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/arthuek/home/sasakis-page/projects/h24-h27kaken>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 宰(SASAKI, Tsukasa)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 40261375

(2) 研究分担者

福田 隆眞(FUKUDA, Takamasa)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号: 00142761

中西 紗織(NAKANISHI, Saori)
北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号: 20584163

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

金香美(KIM, Hyanmi)
淑明女子大学校(韓国)・准教授

林 永利(LIN, Yungli)
國立東華大学(台湾)・教授

張 雅晴(Chang, Sunny)
高雄市立美術館(台湾)・副研究員